

## 豆と俳句 ① 大豆と俳句

塩田 芳之

「蚕豆の花に追はれて更衣」一茶

俳句に興味を持ちながら、この句を知ったのは最近である（大豆でないのが残念）。春早く花をつける蚕豆、それを見て更衣を考える人が現在いるだろうか。生活様式が変化し、豆の花を見ることも少なくなり、俳句の題材は豊富にあっても豆が身近なもので無くなったのは確かであろう。「現代俳句集成全一卷」（立風書房）（安田安正編）（俳人61人うち女性20人）では、約11000句中、豆を詠みこんだ句は45句（他書2冊も同様）であった。

以前に「小豆と俳句」について本誌No.5、No.6に発表した。また、最近「小豆と川柳」、「大豆と川柳」及び「隠元豆その他の豆と川柳」と題して本誌No.76、No.78及びNo.80に発表した。

今回は大豆を詠んだ俳句を栽培、利用、大豆が使われている行事等に分類し、ご紹介したいと思う。原稿を書くに当たり多くの句集、歳時記を参考とし引用させて頂いた。厚く御礼申し上げます。尚、作者の意

図を充分理解せずに分類した句もあると思われるのでご容赦をお願いします。

## 豆蒔く（初夏）（豆植う、畦播き）

大豆、小豆、隠元豆などの豆の種類により多少時期が異なる。

鋤いれて豆蒔く土をほぐすなり 杉田久女  
豆植ゑて土寄せするなり奥街道 細見綾子  
豆播いて仏心のいま夕明かり 飯田龍太  
畧畑たにはたの防鳥ネット大豆蒔く 横見千代子  
夕月や畦豆植の杖打ちゆく 高田蝶衣  
豆を蒔くひとり行き来いりひの没日なる

村上しゅう

豆蒔くに農の凡なる知恵を借る

佐野まもる

畦蒔きの大豆へ灰を一掴み 松浦敬親

豆植うや山鳩の鳴く森のかけ 沖田光矢

豆蒔くや鼎において三粒づつ 古川迷水

## 畦豆（初秋）

畦は田と田の間の仕切りで、土を盛りあげた所、畦豆は畦に植えられた大豆をいう。

畦豆きばの黄み初めけりのちの月 一真

畦豆いたちの鮠うなぎの遊ぶ夕かな 村上鬼城

畦ゆたかにたそがるる畔豆の芽よ  
種田山頭火  
朝露や畔豆刈れば小虫とぶ  
あぜ豆もそばもめっきり大根ふとった  
畦豆しげりゆく径いよいようれし

中村草田男  
畦豆を跨ぐゆくてに春も臥す  
下村槐太  
畦豆の花咲く時の墓参り  
細見綾子  
畦豆も植糸終わりけり国上村  
沢木欣一  
畦豆の信濃の霧の凝りにけり  
草間時彦  
八月の照りに負けたる豆畑  
樋口玉蹊子  
不作田の畦豆もまた実らざる  
村上三良  
馬が来て畦豆喰ふを叱りをり  
久保田真矢

#### 枝豆（秋）（月見豆）

未成熟の大豆を枝のまま収穫したもの、塩茹でのみずみずしい枝豆をつまみに冷えたビールを飲む。中秋の名月の際には供え物とされ「月見豆」とも言われる。

枝豆を召せとやさしき女かな  
其村  
枝豆や和尚手づからつまみ食い  
格堂  
枝豆を人待顔にたぶるかな  
尾崎紅葉  
話ながら枝豆くふあせりかな  
正岡子規  
枝豆は喰ひけり月は見ざりけり  
枝豆のから棄てに出る月夜かな  
枝豆をつまめばはじく仕掛かな  
枝豆や三寸飛んで口に入る  
学校に行かず枝豆売る子かな  
枝豆や能く洗はれて根つきなる  
篠原温亭  
枝豆を喰へば雨月の情あり  
高浜虚子  
枝豆や舞子の顔に月上がる  
枝豆に法説く大坊主小坊主哉  
種田山頭火  
枝豆や雨の厨に届けあり  
富安風生

枝豆の毛の狐色峰をかし  
原石鼎  
枝豆をおせばつぶてや口の中  
五十嵐播水  
枝豆をうけとるものや洪団扇  
芥川龍之介  
枝豆や夫淡々妻淡々  
景山筍吉

涙せし町に覚えしずんだ和え  
中村汀女  
(ずんだ和え：枝豆を茹でてすり潰したもの)  
短日のこの鳩の豆買へといふ  
枝豆の真白き塩しゅうびに愁眉ひらく  
西東三鬼  
枝豆の実の張り切れず走り梅雨

鈴木真砂女  
枝豆のけふで終りが茹でらるる  
枝豆や詩酒生涯は我になし  
木下夕爾  
枝豆を食うて小鳥に似てきたる  
岡崎桂子  
枝豆が汗かいて焼酎のおかわり  
湯本放石  
枝豆の運ばれてくる通夜の席  
島名築子  
稿料として枝豆を送り来し  
田倉稲生  
枝豆の三つ子のみどり押せば飛ぶ  
久保武  
枝豆をしなやかに食べ福祉論  
大浦淑実  
枝豆の碧玉喉に飛び入りぬ  
久米三汀  
枝豆や断ちて忘れし酒の味  
野口里井  
枝豆の手がよく伸びて聞き上手  
小泉旅風  
山国の灯や枝豆の塩かげん  
大串章  
湯道具を抱へ枝豆選びけり  
館岡沙織  
枝豆を大豆と知らず五十年  
可知豊親  
枝豆をつまむ幼児と晩酌す  
矢島路男  
枝豆や人に小さな過去のあり  
望月百代  
枝豆や十枚そろふ手塩皿  
山口たま子  
枝豆を茹でる匂ひでありにけり  
菅井たみよ  
枝豆や夜空に近く座りをり  
金子秀子

枝豆とコップ二つを出しておこ

関澄ちとせ

枝豆を夫に背きて硬茹でに 柿本妙子

枝豆の弾けてみつつ里ごこち 増田萌子

枝豆を食ふや巨人がまた負けし

藤森かず子

頃合に枝豆茹でて寡婦ぐらし 谷いく子

枝豆や実なき男捨てるべし 柴田佐知子

枝豆の緑鮮やかずんだ餅 渋谷一男

さみどりを山と盛りあげ月見豆 中田恒子

枝豆に無口の口を開きけり 三栖菜穂子

父の倍生きて枝豆を弾きをり 斉藤耕心

枝豆の皿空にして一句とす 清水雅之

枝豆の食ひ腹切らばこぼれ出む 三橋敏雄

### 豆引く（仲秋）（大豆引く、小豆引く）

豆畑の葉が黄ばむようになると、実が十分に熟れたので、これを収穫する。茎を土から引き抜くので「豆引く」と言う。続いて豆干す、豆叩くなどの行程に移る。

豆ひきを鳥に見られ能登農夫 細見綾子

豆ひくや北山しぐれ日もすがら 北原常悦

豆ひくや親の世のまま畦まがる 蒲生院鳥

豆引くやむなしく青き峡の空 相馬遷子

風北に変わり豆引働きぬ 石井露月

三日とはつづかぬ天気豆を引く 小島草火

豆引くや芋盗まれし畑主 浜田波静

大豆引く小さき賑ひありにけり

土屋そそみ

豆引くや婆の平安暮れ初むる 横山左知子

### 豆干す（仲秋）（豆干す、豆打つ、豆叩く、豆殻、豆稲架（まめはぎ）、豆筵など）

実った大豆を引き抜いて干した後、棒で叩いて莢から取り出す、豆を筵に広げて干し、さらに乾かす。この過程における「豆打つ」「豆筵」、また豆を取り出した後の「豆殻」なども季語である。

山の辺に豆干す丘や百舌鳥の声

河東碧梧桐

時雨るるや山村稲架に豆干して 大谷句仏

豆殻を干して飛鳥路ただねむし 加藤楸邨

豆稲架の日だまり婆々の居場所なる

細見綾子

豆はぎを守りて鴉をほうと追ふ :

豆筵峠をおりしここに干す 村越化石

豆干すに双手に掬う香りかな 斉藤耕牛

豆殻を焚き初竈ゆれにけり 荻原麦草

豆殻の豆こぼれ燃ゆ発竈 熊谷伊佐緒

豆殻を焚くならばしの初かまど 清水千代

豆殻の軽く焚かれてしまひけり 吉田節子

喪の家の豆殻粘るるまで干さる

木村里風子

よじれとぶ豆殻に日のかたぶけり

福山良子

豆叩くうちでのこづち振るように

岩崎すゑ子

一日があつという間よ豆叩き 津端龍峰

生涯を山に抱かれて豆を干す 尾崎紀子

光る瀬のひびきひねもす豆を干す

鍵和田柚子

豆稲架の乾ききったる山日和 高城玲子

森の端に陽を延べ老婆大豆打つ 佐藤鬼房

辞し去ればすぐに始めぬ豆叩き

中田みずほ

追儺 (ついな) (晩冬) (鬼やらひ、なやらひ)

古くは大晦日、現在では節分の日に行われる儺 (疫鬼) を駆逐する行事、中国から7世紀末に伝来し、平安時代に宮中から始まった。その後、各地の寺社で鬼を追う儀式や煎った豆を撒く儀式が行われるようになり、現在では豆撒き (この時「鬼は外、福は内」と高らかに唱える) の方が主流となっている。(広辞苑、歳時記より)

むつまじや追儺の宵の人の声 才麿  
鬼の出た迹掃き出してあぐら哉 一茶  
山国の闇恐ろしき追儺かな 原石鼎  
古枘や追儺の豆にあたたまり 百合山羽公  
追儺豆地に落ちたるは踏まれけり

細見綾子

竹鳴って鬼打つ豆や雪に散る 石川桂郎  
鬼やらひ二三こえして子に任す 石田波郷  
赤鬼は日本の鬼 鬼やらひ :  
なやらひやそこらに鬼の顔幾許 角川源義  
なやらひや日記書き継ぎ遺書めくも :  
風邪除けの火に掌を温む追儺かな :  
なやらひや福面つけて亡娘は出でず :  
なやらひをすませて憑かる風の神 :  
鬼やらひけふ横雲のぼら色に 森澄雄  
姿ある鬼あはれなり鬼やらふ 三橋敏雄  
姿見の裏のくらがり鬼やらふ 山本右近  
追儺鬼如来の蔭で出をまてり 加藤サヨ子  
追儺豆終りの一打は自我に打つ 高橋志保  
鬼やらひ二人暮らしに福の福 加田静子

偕老の二人が囓みむ鬼の豆 森田公司  
葦の矢のふはりと飛びぬ追儺式 田中王城  
七曜一巡せし病褥や雪の追儺 北野民夫  
なやらひの夕べは赤い火を焚きぬ 飯田晴  
硝子戸を開きて海へ鬼やらふ 山口波津女  
病床やよべの追儺の豆さびし 中尾白雨  
身籠りし妻のこゑなり鬼やらひ 小島健  
裸電球鬼やらふ影巨きくす 山根真矢  
鬼やらふ夫はつくづく大男 田部谷紫  
面少しずれたる鬼をやらひけり 越智哲真  
追儺豆母のしとねにあめふらす 赤松薫子  
鬼役のおくれておりぬ追儺式 上城季野  
鬼という掴めぬものをやらひけり

池内きり子

戸をあけてしりぞく闇へ追儺豆 岡村治村  
豆踏んで鬼戻り来る追儺寺 岡本千尋  
面とりて追儺の鬼も豆を撒く 大橋宵火  
鬼やらふ気もなき豆を買うており

川崎陽子

追儺豆受けし帽子をかむり去る  
子に送る荷にいささかの追儺豆

熊木一二三

佐々木はる

鳩からす集まってくる追儺かな 渋谷はつ  
追儺豆囓みて身うちの鬼払う 竹内原太郎  
松明に凄み表はす追儺鬼 西浦司  
追儺豆鬼ひそむ己に豆を打つ 松本昌弘  
鬼を追ふ豆は夜の木に鳴りにけり

福島小蕾

豆を食ぶだけの二人や鬼やらひ 森奈賀子  
我の他鬼居ぬ家の鬼やらひ 山田慶子  
吾子の描く追儺鬼とはぱっちり目

山本雅子

鬼やらひ不作の豆を驚つかみ 山本登山  
 降り積る雪に沈みぬ追儼豆 吉田邦幸  
 臥す人に鬼打豆をひそと置く 依田久子  
 鬼やらひ大きな声でと言われても  
 小熊ハツ子  
 風の出で佐渡へ近づく鬼やらひ 多賀啓子  
 鬼やらふ夫還曆の声を上げ 小金丸美佐子

**豆撒き（晩冬）（豆打、鬼の豆、鬼打豆、  
 年の豆、鬼は外、福は内、福豆、年取豆）**

節分の夜、各戸に、または各地の社寺で  
 追儼のための豆を撒く行事。鬼やらひ、な  
 やらひなどともいい、「鬼は外、福は内」  
 と唱えながら煎った大豆を撒く。豆を撒い  
 たあと年の数だけ食べる風習もある。

豆音も聞かぬ藁屋に是や此 嵐雪  
 豆を打つ声のうちなる笑かな 其角  
 年かくすり手が豆を奪ひけり 几董  
 緒丹ぬりの鬼もしらめよ除夜の豆 惟中  
 豆打てば鬼も裸にふとし哉 牧堂  
 鬼逃げて豆のたばしる簀の子かな 甲二  
 炉開きや火箸にかかる鬼の豆 許方  
 うき人の閨に豆打つ二つかみ 尾崎紅葉  
 豆撒きをしおる二階の障子かな 篠原温亭  
 敷かれるる鬼一匹やこぼれ豆 松根東洋城  
 鬼の豆嚼みて気力を養へり 長谷川双魚  
 今年まだ雪を見ぬ豆撒きにけり

鈴木真砂女

鬼そこにあるごとく豆打ちにけり  
 豆撒くや小店の持てる部屋二つ  
 福豆に齡の残りは数えざる 安住敦  
 竹鳴って鬼打つ豆や雪に散る 石川桂郎  
 風邪の神赤城出で来て豆蒔夜 村山占郷

豆撒くや妻のうしろのくらかりに 小林康治  
 豆撒やりそめに住むひとの家 石田破郷  
 豆撒けば楽世家めく患者等よ  
 豆を撒く吾がこゑ闇へ伸びゆかず  
 豆撒いてことなかれとぞ祈るなる  
 病室に豆播きて妻帰りけり  
 鬼は外我が家に春の遅きかな 角川源義  
 福は内猿の腰かけあまた来て  
 豆まきに真理はあらず深き闇  
 豆を打つ氷柱の牙の青鬼を 森澄雄  
 豆撒いて仏心のいま夕明り 飯田龍太  
 豆撒けど腹の鬼ども居座りぬ 岡村一堂  
 豆撒くや雪山ふかきかり住居 鎌野秀々  
 子が触れたがる豆播きの父の枡 高羽狩行  
 豆撒いて何かはなやぐ兄弟 山崎一枝  
 湯上りの素足の匂ふ豆を撒く 平間真木子  
 豆播きの男らがまず祓ひはるる 高井睦郎  
 豆打たれある保母の鬼美しき 宮崎水滴  
 仰ぐ群衆みなよき氏子豆を播く 岡部六弥太  
 鬼打ちの豆はねかへす堂柱 赤坂邦子  
 臥す人に鬼打豆をひそと置く 依田久子  
 豆を播く九十六の年女 大塚京子  
 高樓より闇の百鬼に豆を撃つ 和田照子  
 豆を打つ身の鬼去りし気配なく 中田千津子  
 豆を撒く鬼まだ棲まぬ嬰のほとり 野木径草  
 遠くまで豆を撒きたる年男 金澤栄子  
 独り世に撒く豆はただ一掴み 品川鈴子  
 つかみてはまだあたたかき鬼の豆 辻桃子  
 豆播きの終わってをりし真暗闇 中村春逸

豆を撒く見えざる福を期待して 里見輝子  
豆撒きや子鬼はジャングルジムの上

白石菊代

豆撒きのさてどの鬼を追い出そか

小池美代子

豆撒きの家に戻りぬ福として 村上章夫  
声低く病む児の部屋に豆を撒く

桑本かつ代

「福は内」とは照れくさきせりふかな

山本樹美雄

笑ふだけの紛れなき母福は内 三宅侃

山神に供へし豆を山に撒く 殿村菟絲子

鬼の豆たんと余ってしまひけり

片山由美子

福豆の枱より福をつまみ食ひ 彦根伊奈穂

鬼よりも病魔が恐し豆を撒く 田口利子

豆播きの昔電燈暗かりき 川崎展宏

福枱にまとも大きく落つ日かな 中村汀女

豆を撒く力こめしが声となり 岸風三郎

呟きて独りの豆を撒きにけり 小坂順子

憚らぬ夫の大声豆を撒く 石川茂子

撒く豆にあらず配らる患者食 吉田北舟子

鬼は外誰も帰って来ぬ夜なり 石川千津子

豆播きを忘れて鬼を飼ひ馴らし 小野藤花

五合枱豆撒だけのものとなる 大木よしえ

気づいたら私はいつも福は内 大木みち

志す花鳥諷詠豆を撒く 大久保橙青

豆を撒く妻はすなわち福の神 加藤章三

豆播きや鬼門の闇は念入りに 片寄青鷗

一人居をつつく鬼いて豆を撒く

桑木かつよ

戦争を始めし鬼に豆を撒く 九鬼梨園

解かぬ荷の上にも豆を撒きにけり

澤田十三絵

昨夜撒きし豆恪勤（かくきん）の靴の中

下川光子

豆を撒き大群衆が総崩れ 塩川雄三

帰国せし妹に豆撒かせけり 田中青鳥

敷かれるる鬼一匹やこぼれ豆 松根東洋城

子育ての頃の大声豆を播く 中村藤子

豆播き略した今日の雨戸を閉める

西宮二楼

わが身より出でたる鬼へ豆打てり

平賀良子

身の内の鬼眠らせて豆を撒く 平野周子

声低く病む児の部屋に豆を撒く 宮下元恵

独り居の豆播き声を張り上げて 門馬清子

豆播きの豆踏みつぶし出勤す 山田千里

豆を打ち見えざる鬼をひたと追う

矢沢ふさ子

忌籠りの窓少しあけ豆撒きぬ 坂口恵子

豆を撒く娘に見惚れ豆拾はざる 金岡道子

修羅の身の鬼を退治と豆を撒く 橋本幸男

爺婆の豆播き福も鬼もなく 市野川隆

### 年の豆（豆撒きの項を参照して下さい）

三つ子さへかりかりかりりと年の豆 一茶

初雷や乳母がもてる年の豆 一友

須弥団の三宝にあり年の豆 高浜虚子

一百に足らず目出度し年の豆 :

広前ににほひたてたり年の豆 阿波野青畝

灯の宮の春日明神年の豆 :

年の豆手に受けあまるめでた夫 及川貞

年の豆病母の掌よりこぼれ易 大野林火

海道のくらき昔の年の豆 百合山羽公



寒屋の内に鳴り止む年の豆  
 年の豆五粒ばかりを摘みけり 鈴木真砂女  
 年の豆転がるひと家に遊ぶ 村山占郷  
 年の豆噛みつつ貧に越されおり 小林康治  
 娘はすでに神となりしや年の豆 角川源義  
 年の豆噛みつつアガサクリステー

草間時彦

癒えし子が年の豆撒く豆の音 石塚友二  
 喪の家や埃にまじる年の豆 石橋秀野  
 年の豆我が杯中に落ちにけり 相馬虚吼  
 年の豆数えて馬鹿馬鹿しくなりぬ

柿沼清子

杉玉の噛みしはよべの年の豆 大下秀子  
 年の豆僅か買ひ置き夫待つも 岡田和子  
 老いけりと夫婦よみけり年の豆 柿山伏  
 絵手紙の鬼はみ出せり年の豆 坂井貞子  
 掌にあふれた九十五粒の年の豆

撰津よし子

病み古りてめでたくうれし年の豆  
 居酒屋の肴となりし年の豆 富本修志  
 庭石の窪みに残る年の豆 内藤みのる  
 年の豆夢ひろいをり無心の児 西井幸徑  
 還暦もにぎれば一つ年の豆 藤原守幸  
 噛みしむる一粒の年の豆 山崎ひらら  
 窯裏の闇に一擲年の豆 岸川鼓蟲子

## 節分（晩冬）

本来は二十四節季の気候が変わる立春、立夏、立秋、立冬の前日の総称であるが、現在では立春の前日（2月3日頃）だけをいう。神社、寺院では邪気を払い、春を迎える為の追儺式が行われる。それが次第に

民間に広がって「鬼やらひ」となり、豆を撒き、鯛の頭や柗の枝を門口に挿すなどして邪気を払うようになった。（歳時記より）  
 節分やよい巫女誉むる神楽堂 召波  
 せつぶんや肩すぼめ行く行脚僧 幸田露伴  
 節分の豆をだまって食べて居る 尾崎放哉  
 節分の夜も更け鬼気も収まり

長谷川双魚

節分の春日の巫女の花かざし 五十嵐播水  
 節分や友をならしてしづごころ

久保田万太郎

送らるる節分の夜のよき車 星野立子  
 かきくもりけり節分の櫟原 石田波郷  
 節分の鬼面福面真理出でよ 角川源義  
 節分と知ってや雀高飛んで 森澄雄

節分や田へ出て霽のあそびをり  
 節分や梢のうるむ檜林 綾部仁喜

節分の雪が田を飛ぶ山を飛ぶ 雨宮きぬよ  
 鬼は見え福は見えざる節分会 江川由紀子  
 生き過ぎてまた節分の豆拾う 木田千代  
 節分の鬼が笑へば子も笑ふ 柴田華代子  
 生きるてふ節分の豆かみしめる 高木初枝  
 節分の鬼にもなれず漂へり 高柳雅代  
 職場の掲示に節分に式挙げるニュース

田川飛旅子

節分の改札通るお鬼の面 田島星景子  
 節分の豆あり枘の見当たらず 辻桃子  
 節分会母の余生を福となす 恒任愛子  
 節分や内なる鬼に目をつぶり 中村恵如  
 節分の鬼の覗きし鏡かな 西村麒麟  
 節分や海の町には海の鬼 矢島渚男  
 節分の豆退院の手に撒かれ 笹尾照子

## 黄粉

似合わしや豆の粉飯に桜狩り 芭蕉  
松過ぎて黄粉餅して老夫婦 遠藤梧逸  
到来の亥の子をみれば黄粉なり 夏目漱石

## 煎豆

煎豆に菊植糸し手の匂ひかな 几董  
煎豆をお手のくぼして梅の花 高浜虚子  
いり豆を手づかみにしてこぼれる

尾崎放哉

ぱくぱく返事をして豆がいれる :  
煎豆をかぞへかみつつ更衣 加藤楸邨  
風邪の神打たばやと豆炒らせけり

石川桂郎

豆煎ってをり遠くより春の雷 長部紅女

## 鶯餅

鶯をかたどる春の餅菓子。餡を包んだ柔らかな餅に青黄粉（青大豆の粉）をまぶして鶯の姿に似せてつくる。春の一定期間しかない。

鶯餅の持ち重りする柔らかさ 篠原温亭  
街の雨鶯餅がもう出たか 富安風生  
鶯餅帰心うながす置時計 阿部みどり女  
老いしかや鶯餅に喉つまり 後藤夜半  
鶯餅つまみどころのありにけり

百合山羽公

からうじて鶯餅のかたちせる 桂信子

鶯餅食ふやをみなをまじへずに 森澄雄

仏壇に鶯餅の粉こぼす 小島健

鄙ぶりの鶯餅ぞ緑濃き 島谷征良

鶯餅二つ並べば二人めく 笈川夜白

菓子鉢に餅のうぐひす二羽残る 辻田克己

鶯餅わが買ひ妻も買うて来し 岩崎健一

首ねっこやんはりつかみ鶯餅 桧紀代

掌に受けしうぐひす餅のすがたかな

宮崎梨響

ペンにつくうぐひす餅の粉はらう

榎原抱芽

抓みたるうぐひす餅に声のなく 平井岳人

鶯餅箱に片寄る雨の午後 本田恵美子

手をそえてうぐひす餅の粉こぼし

白石清江

猫つまむごとく鶯餅つまみ 玉出雁梓幸

鳴きそうな鶯餅の胸の張り 蛭子雷児

喉元につめたき鶯餅の餡 川崎展宏

かたはらに鶯餅のやうなひと 石田勝彦

鶯餅いまに鳴きだすかもしれぬ 藤岡築邨

稿料は鶯餅の十個分 須佐薫子

便箋の鶯餅の粉をとばす 岡田史乃

はしたなき鶯餅の黄粉かな 野村喜舟

うづくまる鶯餅の頭かな 星野恒彦

たひらかに鶯餅を持ち帰る 水上黒介